

農産FAX情報 第6号

令和5年8月1日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

1 秋まき小麦

(1) 麦稈のすき込み、緑肥栽培

○麦稈は分解が遅いため、ストローチョッパー等で細断し、すき込みましょう。

○麦稈すき込みに伴う窒素飢餓回避のため、窒素施肥を行う必要があります。ただし、麦稈の分解に利用される窒素肥料は一部であり、一部は麦稈の分解に利用されず流亡することが想定されるため、緑肥の栽培を検討しましょう。

表1 緑肥作物の栽培例

緑肥	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			作付効果
		窒素	リン酸	カリ	
えん麦	15~20	4~6	5~10	0~5	後作のばれいしょそうか病発生軽減
えん麦野生種	10~20	5	5	0~5	後作のばれいしょそうか病発生軽減 ネグサレセンチュウ抑制

※家畜ふん尿・スラリーを化成肥料に代替可。

※土壌診断でリン酸・カリが過剰な場合は、窒素のみ施用。

2 ばれいしょ

(1) 疫病防除

○疫病菌による塊茎腐敗は、茎葉の疫病菌が土壌中に侵入し、塊茎に感染して発病します。茎葉に効果があっても、塊茎腐敗には効果がない薬剤があるため、薬剤の選択に注意してください。

(2) 軟腐病防除

○高温多湿な条件下で発生が増えるため、引き続き予防的防除を実施してください。

3 てんさい

(1) ヨトウガ防除

○8月上旬からは第2世代の幼虫発生に注意が必要です。第2世代の幼虫は、8月上旬から10月下旬まで加害します。複数回の防除を行う場合は、同一系統薬剤の使用は避けてください。

○薬剤の効果は、幼虫の齢が進むにつれて低下するため、若齢幼虫のうちに防除を行う必要があります。

(2) 褐斑病防除

○病害虫発生予察情報より、今年は初発が早く高温予報による多発が警戒されています。

管内で褐斑病の発生が確認されていますので、高温多湿時には薬剤の散布間隔を10日以下に短縮することを検討してください。

(3) 葉腐病防除

○本病は気温 20℃、湿度 95%程度の高湿多湿条件が 2～3 日続くと発生しやすいです。褐斑病とあわせて防除を行ってください。

4 豆類

(1) 菌核病・灰色かび病防除

○多くのほ場で開花期を迎えています。菌核病は開花期以降の多湿、灰色かび病は、低温多湿で発生が多くなるため、気象経過に注意しましょう。

○小豆の 1 回目の防除開始目安は開花 1 週間後、大豆は 10～15 日後です。その後、10 日毎に 3 回防除を行ってください。

(2) 炭疽病、さび病

○炭疽病、さび病の発生が確認されています。引き続き予防的防除に努めましょう。

表 2 菌核病・灰色かび病の防除薬剤例

薬剤名 (登録作物)	成分名	使用倍率	使用時期	使用回数
パレード 20 フロアブル (小豆、菜豆)	SDHI (ピラジフルミド)	2,000 倍	前日	3回
ミリオネアフロアブル (小豆)	SDHI (インピルフルキサム)	4,000 倍	前日	4回
プライア水和剤 (小豆、大豆、菜豆)	N-フェニルカーバメート・MBC (ジェットフェンカルブ・ベノミル)	1,000 倍	収穫 14 日前	4回
ファンタジスタ顆粒水和剤 (小豆、大豆、菜豆)	QoI (ピリベンカルブ)	2,000 倍	収穫 7 日前	3回
カンタスドライフロアブル (小豆、菜豆)	SDHI (ボスカリド)	1,000～ 1,500 倍	小豆：7 日前 菜豆：21 日前	小豆：3回 菜豆：2回

※プライア水和剤、ファンタジスタ顆粒水和剤は炭疽病の同時防除が可能。

※ミリオネアフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、カンタスドライフロアブルはさび病の同時防除が可能。

秋まき小麦収穫後の除草剤散布など、ドリフトに注意！

熱中症に注意！こまめな休憩・水分補給！

機械の点検や調整は、必ずエンジンを停止！